



旧石器時代の京都

はじめに

京都府内には旧石器時代の遺跡が非常に少なく、その内容も乏しいものと捉えられています。ここでは、これまでの京都府内での旧石器時代や縄文時代草創期の遺物の発見と発掘調査を振り返って、問題点を整理していきます。

1949年の群馬県岩宿遺跡いわしゅうくの発見によって、日本ではじめて旧石器時代遺跡の存在が明らかになりました。京都府内では、1970年に京都市西京区大枝遺跡おおえにおいて旧石器時代の遺構・遺物を求めてはじめての発掘調査がおこなわれました。発掘調査の結果、縄文時代早期の押型文土器などとともに瀬戸内技法で製作されたサヌカイト製の石器群を採集することはできましたが、旧石器時代の包含層を確認することはできませんでした。

遺跡における降下火山灰

旧石器の編年には、「広域火山灰」と呼ばれる火山灰層を基準におこなわれます。火山灰は広い範囲に降下し堆積するので、その火山灰層を基準にすると、広い範囲で石器の前後関係を比較することができるからです。ここでは京都府内の各遺跡で見つかった火山灰層を中心に見ていきます。

京都府内では平安神宮周辺の火山灰堆積層が有名です。1989年の京都市左京区岡崎遺跡おかざきの調査では、始良火山灰層直上の泥炭層あいらかざんばいから大型偶蹄類ぐうていりいの足跡化石が検出されました。これらの足跡は最終氷期（約2万年前から1万5千年前）のものとされています。1998年の調査では、大山系だいせんの火山灰（約2万年前）と始良火山灰（約2万5千年前）をそれぞれ単一の層で検出しました。それらの間には1.4mの堆積物があり、泥炭層も複数枚検出しましたが、遺物は

旧石器時代の京都



成勝寺跡の火山灰堆積

出土しませんでした。

向日市^{でんちよう}殿長遺跡の調査では、始良火山灰層直上の泥炭層からウシ類と考えられる足跡化石が発見されています。この足跡も最終氷期のものと考えられています。

亀岡盆地では、鹿谷^{ろくや}遺跡の発掘調査において、泥炭層とともに始良火山灰層が検出されています。盆地南部の案察使遺跡では、後背湿地と考えられる場所からアカホヤ火山灰層（約7,300年前）とともに、層厚約10cmの^{おき うつりよう}隠岐鬱稜火山灰層（約1万7百年前）が検出され、その下層から縄文時代早期の押型文土器が出土しています。

石材の利用

近畿地方では、奈良県葛城市と大阪府南河内郡太子町を跨ぐ標高517mの二上山で産出するサヌカイトが、ナイフ形石器の主要な石材として用いられています。特に瀬戸内技法で製作された石器はすべてサヌカイト製です。この現象は丹波山塊中に位置する京丹波町^{こも}蒲生遺跡でも認められ、採集された^こ国府型ナイフ形石器はサヌカイトで作られていました。

一方、旧石器時代に用いられた石材で、京都府内で産出するものにはチャートがあります。チャートは丹波山地にあたる丹波帯の露頭面や転石から入手できます。また、丹波帯より南部の地域では、丹波山地を源とする河川により運ばれた堆積物の中や大阪層群中から採集できます。

国府型ナイフ形石器以外の2側刃加工のナイフ形石器は、チャートの使用率が著しく増加します。京都市右京区^{しょうぶだにいけ}菖蒲谷池遺跡、八幡

昔むかし・・・。～京都府の遺跡をよむ～

市荒坂遺跡、平安京右京五条二坊九町・十六町、京都市西京区大枝遺跡、綾部市以久田野遺跡、綾部市旗投遺跡、南丹市八木町池上遺跡などでチャート製のナイフ形石器が出土しています。

近畿地方以外で産出する石材には、黒曜石と硬質頁岩があります。宇治市二子塚古墳から信州産と考えられる黒曜石製の茂呂型ナイフ形石器が出土しています。亀岡市鹿谷遺跡からは、黒色の黒曜石製の槍先形尖頭器が出土しています。

丹後地域では、まだ確実な旧石器時代の遺物は発見されていませんが、縄文時代の遺跡の石材利用状況を見ると、北陸地域の安山岩や在地流紋岩、緑色凝灰岩、玉髓などの使用の可能性も考えられます。緑色凝灰岩は旧丹後町から旧久美浜町（現京丹後市域）の海蔵崖に露頭があり、多くは軟質ですが、転石の中には硬質なものも含まれるという報告があります。また、玉髓は丹後半島の竹野川・溝谷川・宇川の河原、丹後町や網野町の海岸部分で採集できます。京丹後市弥栄町の鳥取城跡では、玉髓製の削器と鉄石英製の素材が出土していますが、確実に旧石器時代と断定できる資料ではありません。



(中川和哉)

旧石器時代の石器（縄文時代草創期の石器を含む）